

問わず語りの 人間力原論

高見大介



未来は自分で創る

手洗いうがいを徹底する生活にも慣れてきたのだが、この季節の手洗いはつらい。骨身にしみるような水の冷たさに「寒の水か」と思いながらその水をコップにくんでみた。

寒の水という言葉を知ったのは、中学3年生の1月。学校をサボりがちでお世辞にも

良い生徒とは言えなかった僕に、ある先生が教えてくれた。その先生は、産休に入られた先生の代わりに来られたおじいちゃん先生。温厚で、とてもきれいな正しい日本語を使う方だった。

その先生は僕を呼び出すと、水筒に入った水をコップに入れてくださり「寒の水です、君と飲みたいと思い、山でくんできました」とおっしゃり、僕の前に差し出してくれた。コップの水を眺める僕に先生は、自分の青春時代のお話をされた。

先生がちょうど僕と同じ中学生くらいの時、満州で終戦を迎

え、命からがら引き上げてきたこと。食べるものがなくてとてもつらかったこと、何が起こるか分からない中でとても怖かったことも含め、僕に話してくださいました。「それでも私は生きました。未来は僕自身が創ると信じて」と。そして最後に「君の未来は君自身が創るのです、希望を持ちなさい」。

当時の僕の全てを包み込んでくれるようなその言葉を聞いた僕は、返答に窮して「先生、寒の水とは何ですか」と聞くのが精いっぱい。すると先生は「この冷たい水は腐りません、だから人間の心も腐らないように

と、薬として昔から飲まれているのです」とおっしゃった。それを聞いた僕はコップの水を一気に飲み干したのが「寒の水」と僕の出会いだ。

あれから30年以上がたち、世の中は、そして僕は変わっただろうか。先生は現状を見て何とおっしゃるだろう。先生が鬼籍に入られた今では聞くことはできないが「未来は自分で創る」という言葉を信じ、今年も生きていこう。そう思いながら、コップの水を飲み干した。

たかみ・だいすけ 日本文理大 人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。42歳。